



<100>

痛み取り、手尽くし

下松市・阿部クリニック院長 阿部政則

まだ在宅診療が盛んにうたわれていなかつた頃、末期の患者さんの往診はとても大変でした。今のように訪問看護という考え方も無く、遠方になると半日ばかりとなることもあります。

当院が開院してまだ肺がんの末期のお父様(72)を、当院のホスピスに入院させたいといつ依頼がありました。友人は呼吸器の専門医でした。ホスピスが良いと判断したのにはよほどの覚悟があったのでしょう。すぐに受け入れ態勢を整えて入院の日取り、必要な設備、装置、環境などを準備しました。状態は良くなかったので、体

調の良い時を見計らい搬送しました。入院後、強いがん性疼痛のために数日間、眠れていなかつたことが分かりました。医療用麻薬や神経ブロックを組み合わせて痛みを取りようにしました。医療が強すぎたんじやないか」と不機嫌になりましたが、「疲れがたまつていたから」と説明して、様子を見ました。

入院3日目の朝、おそ一白半も眠つてから、お父様は目を覚ました。「ここほどとを覚えていなかつたことを覚えていたが、いろいろ伺いました。痛みや息苦しさ、倦怠感など、いろいろ伺いました。強い症状は訴えられず、ぐっすり眠れてしまひでしようか、体も樂になりました。」「随分楽になりました。」友人が私に言いました。

入院後2週間ほどして頃、友人が私に言いました。金身状態は良くないけれど、本人が『できれば最期は家で迎えたい』と言うのだが、どうだらう」。私たちには、身体の状態や症状のコントロールの真倉を考え、移動するなら「今しかない」と判断し、すぐに退院

しました。翌朝、友人から電話がありました。「あれから父はとても安心して少し眠つた。普段は口にしないようなお酒を少し飲み、気分が良いとお風呂にも入ったんだよ。とても氣持ち良さそうでうれしかった。夕食も一緒に食べ、普段は口にしないよう

な涙がこぼれました。

◇ ◇ ◇

医療エンジニア「ホスピスから」は2009年10月に連載を開始し、今回で第100回を迎えました。終末期医療や在宅介護の在り方を地域に根差した視点で伝えてきた連載の節目は、ワイド版で掲載しました。



あべ・まさのり 山口大医学部卒業後、同付属病院などで手術チームの麻酔科医として働き、下松市の下松記念病院(現・周南記念病院)では痛みを取る技術を生かしてペインクリニックも担当。1993年に下松市で開業。末期がんの患者の痛みを和らげ、人生を最後まで充実させる医療を目指して、98年にホスピスを開院した。2015年には、病児・病後児保育施設「タツノ子ハウス」も開設した。趣味はランニング。北九州市出身。61歳。

平成30年1月29日 毎日新聞

ホスピスから

の段取りを始めました。自宅まで車で約1時間。今のように介護タクシーも無く、救急車も使えないため、スタッフの手配、自宅での酸素吸入や装置など、考

えられるだけのあらゆる準備を整えて、当院を出発しました。それだけの準備があり、自宅に無事到着し、部屋でゆっくり休むことができました。その後、私たちも状態の確認、設備の点検などを終え、後は友人に任せて帰院したのでした。

そして翌朝、友人から電話がありました。「あれから父はとても安心して少し眠つた。夕食も一緒に食べ、普段は口にしないよう

なお酒を少し飲み、気分が良いとお風呂にも入ったんだよ。とても

氣持ち良さそうでうれしかった。夕食も一緒に食べ、普段は口にしないよう

な涙がこぼれました。

◇ ◇ ◇

医療エンジニア「ホ

スピスから」は2009

年10月に連載を開始